学校便り

長崎市立日見中学校

令和4年8月9日
第8号(平和特集号)
文責　校長　平野

「平和に関する考察 」
～被爆者なき時代から核兵器なき時代へ～

今日は、長崎に原爆が投下されて７７年目を迎えます。本校でも平和集会を行い、平和と核廃絶について思いを新たにする機会を設けました。

どうすれば、子ども達が「平和で豊かな社会」の中で生きていくことができるだろう。特に平和の実現については自分の責務だと感じ今まで真剣に考え取り組んできたつもりです。

今回は、私が教職に就く前からずっと疑問に思い答えを探し続けてきたことを、「考察」というかたちで掲載いたしました。長くなりますが、バトンを渡すつもりで書きましたので、日見中の関係者に限らず、教職にある人達などできるだけ多くの人にも読んでいただければ幸いです。

【 「東京裁判」と戦争責任 】

今から約４０年前、私は「東京裁判」というドキュメンタリー映画を観た。「真珠湾でキッド提督を殺した者を殺人罪に問うのであれば、私は広島と長崎に原子爆弾を落とすことを命令した司令官とその国の元首の名前を挙げることができる」と発言するワンシーンをＴＶで見て、強い関心を持ったからである。

それは日本人被告を弁護したアメリカ人ブレイクニー氏の言葉であった。

東京裁判というのは、第２次大戦後の１９４６年５月から１９４８年１１月の間、東京の市谷旧陸軍省参謀本部で、連合国軍が戦争犯罪人とした大日本帝国の指導者などを裁いた正式名称極東国際軍事裁判である。

裁判を受ける東条英機

「デス・バイ・ハンギング」というウエッブ裁判長の声が法廷に響き、最後はＡ級戦犯とされた東条英機ら７名に絞首刑（死刑）が言い渡された。

罪状は「平和に対する罪」であった。多くの日本人が「これで戦争の首謀者はいなくなり、これから世界は平和になる」と信じることになった。

映画を観たのは大学２年生の時だった。授業が終わってから１０分程歩いて東京飯田橋の佳作座に着いた。ほぼ満席のうえシートは狭くて固く映画は４時間半以上に及んだ。それにも関わらず、トイレに行くのも忘れて見入っていた。

終わったのは夜１１時過ぎ。興奮冷めやらずそのまま友人のアパートを訪ね、眠い目を擦りながら聞いてくれた相手に対して一方的に話し続けた。当時は、この裁判の意味も私自身がどのように受け止めればよいのかもあまり分からないまま、とにかく今観たものを誰かに話さずにはいられなかったのだと思う。

【 平和実現の主体 】

１９５２年、原爆死没者の御霊を慰めるために広島の平和記念公園内に慰霊碑が建立された。

ところが、東京裁判で唯一人日本人被告全員無罪を主張したインドのパール判事が、広島を訪れた際この碑文を見て、何度も通訳が間違いないか確認したうえで、「この『過ちは繰り返さぬ』の主語はだれか」と怒ったように尋ねたという。

「原爆を落としたのは日本人でないことは明らかである。その日本人が『過ちは繰り返さぬ』とはどういうことか。落としたのはアメリカ人ではないか。こんな主語があいまいな碑文では御霊は救われない。」という趣旨のことを言われたのである。これに対して、主語は「全人類」と広島市は説明したということであった。

「主語は誰か」という問いかけがなされていたことは、反核平和が人類共通の願いだと信じていた私にとって衝撃であった。確かに、東京裁判の判決にしても広島の碑文にしても、戦争そのものを全人類が共に反省するという視点には十分に立てていなかったのかも知れない。

それ故、現在でも核を使用した国はそれが正当だったことを主張したり、世界の多くの国が抑止論の元に核兵器を保有したりする状況になっているのではないだろうか。核廃絶と平和は主語をあいまいにしたままでは実現できないのではないか、と考えるようになった。

【 長崎から考える世界平和 】

長崎市出身で知の巨人とも戦後最大のジャーナリストとも言われた立花隆氏が、２０１５年に「最後に語り伝えたいこと」として長崎大学で講演を行った。

原爆により犠牲になった「黒い屍体」の写真と中国で皮を剥がれて肉がむき出しになった日本人の「赤い屍体」の絵を並べて、「被爆の実相を伝えることは確かに大切である。しかし、それだけでは核兵器はなくならないし平和は実現しない。終戦後に皮を剥がれ赤い屍体として放置されるほど憎まれた日本人は、それまで中国で何をしたのか。核廃絶を世界に訴えるためには、被爆という被害の歴史だけではなく侵略という加害の歴史にも目を向けなければ十分な共感は得られない」という話しだった。

戦争による犠牲は長崎や広島だけでなく、佐世保・東京・沖縄など日本中にあった。もちろん、アメリカや中国、朝鮮半島・東南アジアの国々でも多くの戦闘員や非戦闘員が戦争により命を落とした。そのことを心に留めたうえで、誰が何をされたのかまた誰が何をしたのかという関係を超えて、核使用や核保有、さらには戦争そのものを否定していくことが必要であるということを伝えたかったのだろう。

私自身平和への想いは、小学校１年生の８月９日に担任の先生から原爆についての話を聞かせてもらったことから始まった。

しかし、この講演の内容を知ることにより、長崎で起きたことだけを一方的に伝えようとするのではなく、相手の国の歴史や文化・日本との関係などを踏まえたうえで、対話を通して伝えていくことの大切さに気付くことができた。

【 核廃絶のシナリオ 】

核兵器による報復の意思を示すことで、相手に核兵器の使用を思い止まらせる。これがいわゆる核抑止論である。しかし、本当の核抑止力は被爆者の証言であったはずだ。将来に生きる人々のために、広島・長崎で核兵器が使われたとき人間に何が起こったのか自身の傷跡をさらしながら世界にその惨状を訴えた。それを聞いた人類は核兵器を簡単に使うことができなくなった。

その方々がいなくなったとき、核兵器使用への恐怖が薄れ再び使われてしまうのではないか、というのが私達の最も恐れるところである。現に世界には核兵器が１３０００発近くあり、開発に鎬を削っている。紛争や対立がきっかけで何が起こるか分からない。

２０２１年１０月、伊王島中学校で「世界から核をなくすために、私達に何ができるのかを考えよう。」をテーマにした対話型学習の研究授業が行われた。その中で、ある生徒が「核兵器を廃絶するためには、世界の同世代の子ども達に訴えていけばいい」と発言した。また、他の生徒は英語やＳＮＳの活用について意見を言った。

確かに、日本の中だけで願っても平和は実現しない。日本の子ども達が、核保有国を中心とする世界の子ども達に

「私はあなたと共に平和な社会で暮らしていきたい」
（I want to live with you in the world in peace.）

という想いを、発信していくことが必要なのだ。

長崎では、子ども達の中に平和を想う心がまるで苗木から大人の木へと樹木が成長するように大きく育ってきた。

世界中の子ども達にその想いを広げることができれば、それぞれの国や地域でも同じようにその想いが苗木のように成長していくのではないだろうか。

平和を想う心を大きく育てた子ども達が世界中で社会を支える大人になったとき、「核兵器はいらない」という選択を行い核廃絶が実現し平和な社会が創造されていくはずである。

絵：樽水伶奈　文：平野俊男